

## ハクチョウの標識調査

国際水きん局（IWRB）では、加盟各国と協力して、アジア、ヨーロッパ、北アメリカに生息するハクチョウ類を対象にして、渡りの調査を進めるため、各国ごとに色分けしたカラーバンドをハクチョウの首と足につけて放鳥しています。



カラーバンドをした白鳥

我国もこの組織に加盟していて、環境庁と山階鳥類研究所が協同でオオハクチョウとコハクチョウの標識調査を行っており、青森県でもこの浅所海岸でオオハクチョウの標識調査を昭和50年から毎年行っています。

### 浅所海岸オオハクチョウ放鳥記録

昭和50年 3月… 5羽（I C 04、05、07、08、09）

昭和51年 3月… 3羽（I C 13、14、15）

昭和52年 2月… 11羽（I C 18～28）

昭和53年 3月… 12羽（I C 44～50、52～56）

昭和54年 2月… 6羽（I C 90～95）

注：カラーバンドの色（日本…緑、ソ連…赤、アメリカ…青）

## 白鳥物語

天正年間（約400年前）のことです。

「南部より軍勢寄せきたる」との報に、当時津軽為信の支配下にあった2代福館城主七戸修理は、出立の際小湊の雷電宮に戦勝を祈ったところ、不思議なことに、どこからともなく数千羽の白鳥が境内に飛び集まり、その壮観はいうべきことばもないありさまでした。

ところが、はるかにこれをきいた南部の軍勢は、水鳥の羽音に列を乱した富士川の合戦よろしく「あれこそ津軽の援軍到着の騒ぎだろう」とホウホウのていで旗を巻いて逃げ帰ったのです。

戦わずして藩境の要地を守った七戸修理は、為信の前で大いに面目をほどこし、これ以後この白鳥を神の使いとして地元民に捕獲を禁じたので、常に境内先の海岸には白鳥が人を恐れず集まるようになり、「郷内の人民はその羽毛を以て造りし器具造も用いることを忌むに至る」と語り継がれています。

（平内町史より）

特別天然記念物

「小湊のハクチョウおよびその渡来地」

昭和 29. 3. 指定

## 浅所海岸



東津軽郡 平内町